

## 高松塚古墳壁画発見五〇年

「壁画は何を語る？ その意義を再考する」

木下 正史

一、高松塚古墳と壁画

一九七二年三月、高松塚古墳で壁画が発見されました。新聞各紙は一面トップで、「戦後最大の見」・「世紀の大発見」・「極彩色壁画」・「飛鳥美人」などと大見出しを掲げて報じました。

以来五〇年の今年、新聞各紙は特集を組み、相変わらずの大見出しが紙面に踊りました。新聞の扱いは適切でしょうか。表面的に過ぎ、壁画が持つ本当の値打を曇らせてしまっているように思います。

発見後、高松塚古墳と壁画の保存・管理は文化庁が担うことになりました。一九七六年、石槨南側に保存修理事施設が設置され、石槨内のカビ等の微生物被害に対応するようになりました。

二〇〇一年、石槨内に大量のカビが発生し、微生物による壁面の汚染が著しくなってきました。

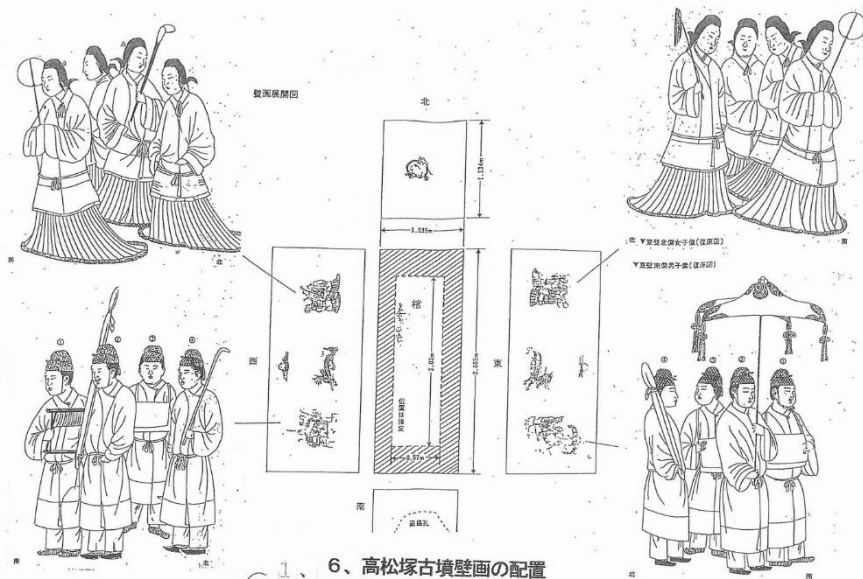
二〇〇五年六月、文化庁は古墳から壁画を石槨

ごと取出し、古墳外で保存・修理することを決定し、二〇〇五年から二〇〇七年にかけて石槨を取り出す発掘調査が実施されました。国営飛鳥歴史公園内に仮設修理事施設を建設して、石槨石材、壁画、漆喰の修理・保存が続けられます。

二〇二〇年三月、カビ等の微生物被害による汚染を除去して修復を終えます。

高松塚古墳は、飛鳥西南方の檜隈の地、つまり天皇家の「陵墓の地」に営まれています。古墳は小さな谷の奥で、丘陵の南斜面に築かれており、風水思想に基づいて造墓されています。

古墳は二段に築かれた径二・三mの円墳で、版築工法によって盛土されています。墳丘の中央に、二上山産凝灰岩切石一六個を組み合わせた横口式石槨が安置され、内壁全面に漆喰が塗られています。石槨の天井は平らに作られています。石槨の中には棺台があり、その上に黒漆塗木棺が据えられていました。



1、6、高松塚古墳壁画の配置

木棺の内面は朱塗されており、外面は唐草文や花卉形の鍍金青銅製飾金具を打ち付けて装飾していました。

横口式石槨は一三世紀に盗掘されていました。海獣葡萄鏡一面、刀の柄や鞘の銀製山形金具などの飾金具、琥珀・ガラス玉類が残されていました。海獣葡萄鏡は西安郊外の独孤思貞墓に副葬されている鏡と同範であることが分かりました。石槨内からは熟年男性骨が発見されています。

横口式石槨の内壁には、天井に星宿図、側壁に日月図・四神図・人物群像が描かれていました。いずれも石室内で描いたものです。天井には、中央に北極星と四輔、その東西南北の四方に各七宿、合わせて二十八宿の星宿図が意匠化して描かれていました。星は円形の金箔を貼り、それを朱線で結んで星宿を表していました。東壁の中央上方には日像、西壁の対称位置に月像が描かれ、両側壁と奥壁のほぼ

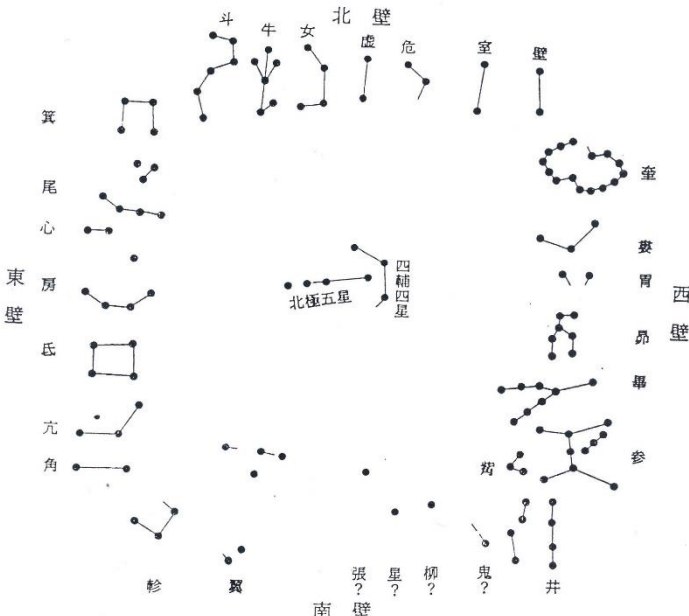
中央には青龍・白虎・玄武の四神像が描かれていました。朱雀は残っていませんでした。

青龍・白虎像は尻尾が股をくぐり、立ち上がる姿で描かれており、八世紀頃に唐で流行した図像と共通しています。

東壁と西壁には、青龍・白虎を挟んで前側に男子像、後側に女子像が描かれていました。男子像はいずれも冠をつけ、長い上衣と袴を着け、黒靴をはき、床几などを手にしていました。女子像は長い上衣にスカート状の裳をつけ、如意・団扇などを持っていました。人物像は、着衣、持物など唐の絵画と共通する要素があり、唐の画風を取り入れて描いたものと考えられます。

高松塚古墳と壁画の年代は、墳丘盛土出土の土器、当時の衣服規定を反映する人物像の衣服、慶雲元年(704)帰国の遣唐使が持ち帰ったと思われる海獣葡萄鏡の副葬などから、

七〇五年頃の造営と考えることができます。



高松塚古墳星辰図

## 二、キトラ古墳と壁画

一九八一年、キトラ古墳石槨の南壁にある盗掘穴からファイバー・スコープを挿入したところ、北壁の玄武像が写し出されました。その後、白虎・青龍・月、天文図、朱雀の画像の発見が相次ぎます。二つ目の壁画古墳の発見です。

キトラ古墳は南側に小谷がある丘陵の南斜面に営まれています。背面側にはU字形の掘り込みがあり、風水思想に基づいて造墓していることが分かります。古墳は径一三・〇mの円墳で、墳丘は版築工法による盛土で築かれています。埋葬施設は二上山産の凝灰岩切石一〇個を組み合わせた横口式石槨で、天井石の内面は彫り凹められており、高松塚古墳の石槨よりも古いことが分かります。

石槨は内壁全面に漆喰が塗られていました。石槨内には棺台と木棺の痕跡があり、木棺は内外面朱塗りで、外面に鍍金青銅製飾金具を飾っていました。

盗掘されていましたが、石槨内からは刀の柄や鞘の飾金具、琥珀・ガラス玉類、そして熟年男性人骨が発見されました。

壁画は、天井に天文図と日月図、四壁に四神図と十二支図が描かれていました。高松塚古墳壁画と共通する点と相違する点とがあり、人物群像は描かれていませんでした。

天井の天文図は北極星を中心に、三五〇以上の星で七二以上の星座を表した全天を描いた本格的な天文図でした。赤い同心円で内規・赤道・外規の三圏を描いており、中心をずらして黄道を描いた精密な天体図です。内規内には北極五星や北斗七星が描かれています。キトラ古墳の天文図は南宋淳祐天文図(一二四七年)を遡る現存世界最古の天文図です。ただ、黄道の位置に間違があり、星座の描き直しもあり、後世の天文図と比べて星数が少ないなど実用の天文図ではないことを示しています。原図は七

世紀末から八世紀初頭頃に日本に伝来したと見られていいます。

日月図は、天文図の外規の円環に接して東に日像、西に月像が描かれていました。日像は金箔を貼っており、鳥の足と尾羽と見られる墨線が認められます。三本足の鳥を描いているのでしよう。日像下には朱線で雲を示し、雲間に山岳を描いています。月像は銀箔を貼っており、日像と同様に朱線で雲を表し、山岳を配しています。ただ、銀箔が剥離しているために、蟾蜍や月兔の像の存否は分かりません。

東西南北の四壁の上方には、青龍・白虎・朱雀・

玄武の四神図が、それぞれ青白赤黒の方位色で描かれています。白虎は北向きです。朱雀像は流麗な運筆と鮮やかな色彩が際立っています。十二支像は各壁に三像ずつ四神図の下に東西南北の方位色で描かれています。獣頭人身像で、いずれも長袍、つまり袖の長い上着を着し、右手に槍状の武器や盾を持っています。子・丑・寅・午・戌・亥が確認できています。



146-2 日像幢



146-1 銅鳥幢



146-3 月像幢



146-5 青龍幢



146-4 朱雀幢



146-6 白虎幢



146-7 玄武幢

漆喰壁が壁面から剥離して浮き上がり、壁画は剥げ落ちそうな状態でした。そこで、ヘラや新開発のダイヤモンド・ワイヤーソーで一―四三片に分割して壁画を壁面ごと取り外し、仮設修理工施設でカビ等の微生物被害による汚染を除去し、漆喰層の強化処理が行われました。修理終了後、分割した一―四三片は狂いなく再構成され、四神の館で公開されています。

三、壁画は、どのような思想を描いているのでしょうか？

高松塚古墳の男子群像のうち、東壁に描かれた最前列の人物には、貴人にさしかける蓋が描かれており、他の人物像は折りたたんだ椅子を持ったり、首から袋を下げる姿で描かれています。女子像も、如意・団扇・蠅払(ユヅリ)などを手にしています。

『貞観儀式』元正受群臣朝賀儀条、つまり元旦朝賀の儀式を定めた規定によると、「官人は蓋・円翳(ウツギ)、顔を覆う団扇・円羽・横羽・弓・箭・太刀・鉾・

杖・如意・蠅払(ユヅリ)・柳筥・胡床(ゴシヤ)などの威儀具を持って、朝堂院朝庭の東西に並び、太刀など武器類は袋に容れる」と見えます。人物群像には、この規定に見える威儀具のほとんどを描いています。また、

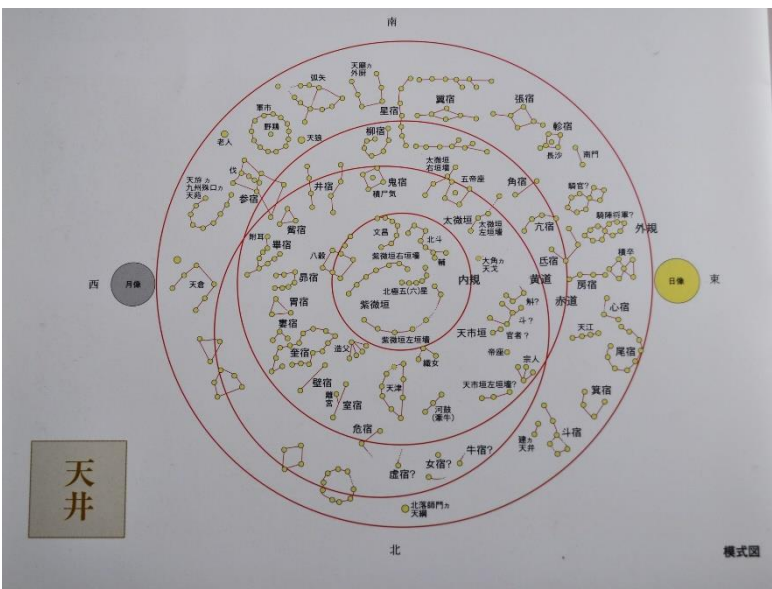
『延喜式』踐祚大嘗祭条の卯日の儀式条、つまり天皇即位後、初めて行う新嘗祭の儀式を定めた規定にも、「諸司威儀の物を陳列すること元旦の儀の如し」とあります。高松塚古墳に描かれた人物群像の持物は、元旦朝賀の儀式での官人らの持物と一致しているのです。一方、喪葬令の親王の葬送具は、「方相輓車(ヒコ)・鼓・大角・小角・幡・金鉦・鏡・鼓・楯」とあり、壁画は葬送儀礼の様子を描いたものではありません。

東壁最前列の男子像上を覆う蓋は、頂部と四隅が濃緑の錦で覆われ、四隅から房を垂らしています。深緑色の蓋は一位の位の者が使う蓋で、それが被葬者を示すものとしますと、被葬者は一位に相当する位の者と判断することができます。

壁画の内容は中国に起源した「陰陽五行説」を  
 図像で示したものです。「陰陽五行説」とは、中国古  
 代の宇宙観・世界観として、陰陽説と五行説が融合  
 したものです。「陰陽説」は陰と陽の二気の消長によ  
 って万物の生成変化を説く思想です。「五行説」は万  
 物の根源を木・火・土・金・水の五元素におき、それら  
 の関係、消長によって宇宙は変化すると考える自然  
 論的な宇宙観・歴史観です。「陰陽五行説」は天文・  
 暦法・医学などに影響を与え、儒学とともに日本に  
 伝来し、古代の政治・社会思想に大きな影響を与え  
 ました。

さて、古代中国では日月星辰の天上界の状況  
 と、地上界の変動とを対応させる思想が発達しまし  
 た。古代中国の天文観では、不動の北極星を天帝の  
 常居と見て、天上界の中心とし、その周囲の全天を  
 28に分割して二十八宿としました。二十八宿のそ  
 れぞれの名称はすでに殷墟出土の卜辞に見えます。  
 周王朝の人々は、「皇帝」とは天界の絶対神の天帝の

子、つまり天子であって、天子は天帝の命を受けて地  
 上の統治を代行すると考えたのです。



「天皇」の称号も道教の北辰信仰の最高神「天皇大帝」に由来するものです。陰陽五行説は、天命を受けて地上を統治する皇帝の政治・社会思想として重要視されたのです。また古代中国では、皇帝(天子)の宮殿の正殿は「太極殿(タイクン)」と呼ばれました。「太極殿」とは北天中央の北極星(太極星)に基づく呼称で、「太極」とは「天地万物の根源」(『易経』)を意味します。

天帝から地上の統治を委ねられた証に、天帝の常居である「北極星」に擬えた「太極殿」を宮むことで天子の政治は権威づけられます。「太極殿(タイクン)」の名は魏の王宮正殿の名称として明帝の青龍三年(二三五)の記事に見えます。唐長安城の正殿も「太極殿」と呼ばれました。

日本での本格的な「太極殿」は藤原宮で始まり、初めて礎石建ち瓦葺の大陸様式の建築が採用されました。北魏洛陽城や唐長安城の「太極殿」の考え方を取り入れたものです。「太極殿」は即位や元

旦朝賀、外国使節の接見など国家の最重要儀式・行事を挙行する宮殿最重要の殿舎でした。天皇が「太極殿」に出御して行われる儀式は、君臣の秩序を確認し、天皇と国家の威厳を示すためのものと言うことができます。

中国の天文思想は、日本へは飛鳥時代に本格的に導入されます。律令制下では中務省の中に「陰陽寮」が設置され、天文・曆・時刻・占いの仕事を担当しました。『日本書紀』天武十年(六七五)の記事に「陰陽寮」の名が見えますから、より前から存在したのでしょう。また、四神は、陰陽五行思想では天の東西南北の四方を守る神です。

前漢代の『淮南子』「天文訓」には、東方の獣を青竜、南方を朱鳥、西方を白虎、北方を玄武、中央を黄竜とし、各方向の守り神と記載しています。

このように、星宿図・日月図・四神図は陰陽が調和し、五行が正しく循環する様を表現しているのです。



四、「文物の儀、是(じ)に備れり」

文武五年(七〇一)六月、唐の律令に倣った「大宝律令」が制定されます。「大宝律令」では「令」のほか「律」(刑罰法)を備えており、初めて体系法典が整えられたのです。同年三月、対馬から黄金が献ぜられ、「大宝」の元号を立てられます。最初の元号です。

大宝元年という年は、律令制による中央集権国家「日本国」を作り上げ、本格的宮殿・藤原宮と最初の都城・新益京を完成させた画期的な年でした。

この年、三〇余年ぶりに遣唐使を任命し、派遣されることになり、当代一流の知識人・粟田真人が執節使に任命されています。粟田真人らは七〇二年六月に大宝律令を持って唐へ出発し、翌年長安に到着し、則天武后に謁見して、律令を制定したこと、国号を「日本国」と名乗ることを伝えます。

粟田真人らは翌七〇四年に帰国しています。

『続日本紀』文武五年正月朔日の記事には「天

皇御大極殿受朝、其儀於正門樹烏形幢、左日像青竜朱雀幡、右月像玄武白虎幡、蕃夷使者陳列左右、文物之儀於是備矣」、すなわち元旦に、大極殿院正門前の中央に烏形幢を立て、左側に日像・青龍・朱雀の幡、右側に月像・玄武・白虎の幡を立て、朝堂院の朝廷に貴族・官人、蕃夷国の使者が、東西に分かれて参列して儀式が行われた、とあります。

元旦朝賀の儀式とは、毎年元旦に天皇が貴族や臣下から年賀を受け、君主と臣下との関係を確認する国家最重要の儀式で、天皇の即位式と並ぶ「大儀」でした。

「大宝律令」完成の目前の文武五年元旦に、盛大な朝賀の儀式が催されたのです。「文物の儀、是に備れり」。儀式・威儀、学問・芸術、政治、法律に関わる文物の諸制度が是に至ってすべて整ったと宣言しています。律令国家「日本国」の幕開けを高らかに宣言する「世紀の祝典」の様子が目に浮かぶようです。

天帝に擬された天皇は、古代中国の道教的な宇宙観である陰陽五行思想に基づいて、天帝の住まいに擬えた「大極殿」前に七本の幢幡を立てて元旦朝賀の儀式や即位儀式など国家最重要の儀式を挙行したのです。

中央の三本足鳥、左右の日月像、四神図の七本の幢幡の配置は陰陽五行思想に基づく天皇を中心とした律令国家の統治理念を示したものです。

中央に立てられた鳥形幢は最重要の幢で、皇位を象徴しているのです。三本足の鳥は中国神話でも靈鳥として登場します。

日月像・四神図は陰陽が調和し、五行が正しく循環する様を表現しています。高松塚古墳やキトラ古墳の壁画は、理想の統治が死後も永遠に続くことを願い描いたものと言えるでしょう。

二〇一六年、藤原宮大極殿正門前の朝堂院朝庭で、七本の幢幡の竿を立てた柱穴群が発見されました。ちなみに大極殿正門は東西七間(約三五m)、南

北二間(一〇m)の建物と分かっています。幢幡の竿を立てた柱穴は七カ所あり、大極殿正門の中軸線、つまり藤原宮の中軸線上に一個、その東西に三角形にそれぞれ三個づつ配置されていました。柱穴は一辺一、九m×二、一mの方形で、深さは一mほどでした。

中軸線上の柱穴は南門基壇端から南へ二一m、つまり七〇尺の位置にあり、柱径は七〇cmで、柱は抜き取られていました。三角形配置の柱穴の内側の東西柱間の距離は二四m、つまり八〇尺で、それは大極殿正門の中央5間の幅と合致しています。

外側の柱穴は内側の柱穴から六m、すなわち二〇尺の位置にあります。発見した幢幡竿の柱穴は七〇一年の元旦朝賀の儀式で立てた幢竿の跡と考えて間違いありません。

令制では、元旦朝賀と即位の大儀では大極殿前に銅鳥像・日像・月像の幢と朱雀・青龍・白虎・玄武の四神の幡を立てることを規定しています。

九二七年成立の『延喜式』にも元 旦朝賀や即位などの大儀での立幢規定が見えます。それによると、七本の幢幡は二〇尺間隔で、東西一直線に立て並べ、その他、左右近衛府・左右兵衛府が竜尾道下などに、竜像・鷹像、虎像・熊像などの旗を立て並べるところを記載しています。

平城宮後期大極殿の南前庭では、七八一年に行われた桓武天皇即位儀式で立てた幢幡の柱穴七カ所が発見されました。柱穴は四m×二mほどで、幢幡の竿と支柱の計三個の穴がありました。幢幡の竿は東西一直線に立て並べられており、柱穴は約七、五m、すなわち二五尺間隔で立て並べられ、七本の幢幡の東西総長は約四五m、つまり一五〇尺を測り、大極殿の間口幅とほぼ一致しています。

神宮文庫『群書類聚』に収められた「文安御即位調度之図」は一二世紀頃の幢幡樹立の様子を描いたもので、文安元年（一四四四）に藤原光忠が書写したものを基にした江戸時代の写本です。

七本の幢幡は、中央に銅鳥幢、その左（東）に日像幡と青龍旗・朱雀旗を立て、右（西）に月像幡と白虎旗・玄武旗を一直線に配列しており、幢竿の高さはいずれも九mとあります。

銅鳥幢は、幢竿の先に銅製の蓮華座上に三本足の鳥を据え、七筋の玉飾を垂らしています。日像の幡は径三尺の金銅製円盤に金箔を貼り、その上に朱で鳥を描き、円盤の下に九輪をはめています。

月像の幡も径三尺の金銅製円盤に桂樹・兔・キガエルを描いており、円盤の下に九輪をはめています。月兔図は不老長寿の妙薬を搗く図で、道教的な神仙思想を基にした図像です。

四神像の幡は、四角い錦の布に朱雀・青竜・玄武・白虎の四神を描いており、竿の先端に矛を立て四神像下に四枚の布を垂らしています。

江戸時代中期に描かれた「御即位之図」は内裏正殿にあたる紫宸殿での即位式の模様を描いたもので、紫宸殿前に七本の幢幡と、その前の東西に、それ

ぞれ五本以上の旗が描かれています。七本の幢幡は「文安御即位調度之図」と共通しています。

元旦朝賀と即位式での立幢制度は文武五年の元旦朝賀の儀式で成立した制度がほぼそのまま江戸時代まで継承されたのです。

藤原宮大極殿南門前で発見された幢幡七本の配列の在り方は、陰陽五行の調和を願う七曜図を地上に投影したものでした。

## 五、藤原宮の建設

『日本書紀』天武一三年(六八四)二月二八日の記事には、広瀬王・大伴安麻呂、判官・録事・陰陽師・工匠等を畿内に遣して、都造るべき地を視占させたと見えます。三月九日の記事には、「天皇、京師を巡行きたまひて、宮室之地を定めたまふ」とあり、このとき定められた宮地こそ藤原宮地です。藤原宮地は香具山・耳成山・畝傍山の大和三山と飛鳥川が鎮護する四神相応の地に営まれました。藤原宮地

は、陰陽師が陰陽五行説に適った吉地と視占したのを受けて、宮の適地として決定されたわけです。

天皇を頂点とする律令制による中央集権国家は、大宝律令、二官八省制、天皇称号、儀式、元号制、国郡里制などが整備されることによって出来上がります。

藤原宮と新益京は理想の政治を実現する舞台として建設されたもので、それは中国の宇宙観・世界観を基に、方形の宮殿・方形都城が採用され、初めて瓦葺き礎石建ちの大陸様式の宮殿が建設されました。先述したとおり、藤原宮正殿の「大極殿」も中国皇帝の公的政治の正殿の「太極殿」に倣って建設されたものです。

七世紀後半から8世紀初頭、為政者達は中国皇帝の国土統治理念や律令制度、宮殿構造などを導入して、天皇を中心とした律令制による中央集権国家を作り上げていったのです。

高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の内容は、律令の編纂、律令国家「日本国」の建設、藤原宮と新益京の建設の理念と深く関わっているのです。壁画の日像・月像・四神図は、元旦朝賀の儀式や天皇の即位儀式で立てる七本の幢幡と同じ内容構成です。陰陽五行説に基づく天皇を中心とした律令国家の統治理念を表現したものと言えます。

北極星座群を描いているのは、天上を天帝が、地上を皇帝が支配する体制を来世まで維持するという中国の政治思想に基づいており、被葬者を天帝に擬えて描いているのでしよう。

高松塚古墳の被葬者は、天皇に近い皇族説、有力官人(貴族)説、渡来系王族説などが提唱されてきました。律令国家の理想の統治理念を描く壁画の主題を考えると、皇族それも天皇に近い地位にあった人物以外には考え難いのです。高松塚古墳からは壮年男子の遺骨が出土しており、被葬者の有力候補として忍壁皇子があげられます。

忍壁皇子は天武天皇の第九皇子で、生年は不明ですが、亡くなったのは七〇五年です。忍壁皇子は大寶律令編纂を主宰し、七〇三年に知太政官事となって政務を統括しました。そして慶雲三年(七〇五年)五月に三品で薨去しています。

高松塚古墳の人物群像は、大寶律令が完成した大寶元年の元旦朝賀の儀式の様子を描いていてではないでしょうか。海獣葡萄鏡は遣唐執節使の粟田真人が七〇四年に唐から持ち帰って、忍壁皇子に献じたものではないでしょうか。粟田真人は大寶律令の編纂に、学識面を主導する立場で参画しており、忍壁皇子との深い関係が窺えます。

高松塚古墳・キトラ古墳の壁画は、古代集権国家が飛鳥・藤原の地で確立していった頃を目に見える形で物語っています。「日本国誕生」の日が生まれ蘇ってきます。

高松塚古墳とキトラ古墳は、「飛鳥・藤原」の世界遺産登録をめざす構成資産群の中でも重要な資

産です。高松塚古墳とキトラ古墳を含む資産群は、「中央集権国家の形成過程を物語る希有の文化遺産」であり、「東アジアとの技術や文化の交流」を明確に示す顕著な価値を持つ資産です。世界遺産としてまさに相応しい価値を備えているということができます。

高松塚古墳・キトラ古墳の壁画は国宝であり、古墳は特別史跡です。両古墳ともに飛鳥国営公園内にあり、明日香法の対称として、日本で最も手厚く保護が図られています。

石槨や壁画を墳丘から取り外していること、現地保存がかなわなかった事情やその検討の過程、取り外しや修理等の実際、当分の間、古墳外で保存・活用することを国際社会にしっかりと発進し、理解を得ることが重要です。